

令和 7 年 度
一関修紅高等学校一般入学試験問題

第 1 時 限
(1月24日 8 : 50 ~ 9 : 40)

国 語

(注 意)

- 1 「始めなさい。」の指示があるまで、問題を見てはいけません。
- 2 答えは、必ず解答用紙の「答」の欄に記入しなさい。問題用紙に書いても無効です。
- 3 答えは、記号・文字・言葉・文などで書くようになっていますから、問題をよく読んで、定められたとおりに書きなさい。
- 4 書き誤りをしたときは、きれいに消してから新しい答えを書きなさい。はっきりしない答えを書いた場合は、誤りとされます。
- 5 解答用紙の※印の欄（得点の欄）には記入してはいけません。
- 6 時間内に書き終わっても、その場に着席していなさい。
- 7 「やめなさい。」の指示があったら、直ちに書くのをやめ、筆記具を置きなさい。
- 8 問題用紙は、表紙を含めないので13ページで、問題は6題です。

〔本文までのあらすじ〕

「ぼく」は、柔道家の矢田^{やだ}が一人で稽古^{けいこ}する姿を見て、その動きに引き込まれ、十三歳で矢田道場に入門した。だが、稽古は毎日受け身ばかりで飽きてきていた。そんな中、矢田と組み合うことになった「ぼく」はたやすく矢田に転がされ、まったく受け身がとれない。

「きみは、自分が受け身をしやすいように倒れてきたんだ。しかし、相手はそんな都合よく投げてはくれない。お互いが技をかけ合って、双方が捻^{ねじ}れ合って倒れたら大怪我^{けが}をする。受け身という大事な技の稽古をなおざりにしたら、他のどんな技も身につかないぞ」

矢田先生はそう言ったが、すぐに「構え」の稽古を始めてくれた。

ぼくが、先生の言葉の意味を理解したことを知ったからだ。

この「構え」というのは、その人の力量がすべてあらわれる。まだ組み合ってもいないのに、構え合った瞬間、ああ、自分などの がたつ相手ではないとわかる。その逆の場合もある。

これは柔道の世界だけではない。空手も剣道もボクシングも、みな同じだ。

「構え」はまず「立ち方」から始まる。ずっと自然に立って構えた姿。いわゆる立ち姿だ。バレリーナは、踊らせなくても、立ち姿だけで力量がわかる。

舞踊の世界はみんなそうだ。優れた舞踊家は立ち姿が美しい。

ならば、どうしたら美しく立てるか。美しく構えられるか。

美しく立ち、美しく構えなければ、美しい動きへと移行できない。

どこを体の中心とするか。東洋ではそれを「丹田^{たんてん}」とした。臍^{へそ}の下あたりだ。自分の体はその丹田で支えていると意識しつづける。すべての動きが丹田を軸としていると考える。

立っているときも、坐^{すわ}っているときも、横になっているときも、歩くときも走るときも、丹田が中心だ。

そう教えられたからといって、ああそうですかとすぐに丹田を中心に動けるわけではない。

四六時中、その意識を持ちつづけて、五年くらいたつと、やっと少しわかってくる。

ぼくは矢田道場で稽古をつづけた五年間、先生から「丹田に心が集まっていない」と言われつづけた。

大学に入った年、ぼくは柔道部の顧問をしていた教授に誘われて気が進まないまま入部した。大学生になったら、柔道はひとまずやめて、機械工学の勉強に邁進^{まいしん}したかったが、リーグ団体戦で一勝もしたことのない柔道部に活を入れてやりたいといううぬぼれもあった。

大学入学と同時に矢田道場をやめたのは、柔道部に入部しなければならなかったただけではない。矢田先生が七十七歳になり、胆石の手術を機に道場を閉め、柔道の世界から引退することを決めたからだ。

ぼくは自分の人生に後悔はないが、矢田先生ともっと早く出会いたかったと思うことはある。しかし、出会ったとき、先生は七十二歳、ぼくは十二歳だったのだから、それより以前に出会っても、ぼくは何かを学べるどころまで至ってはいなかったことになる。

先生は、手取り足取り教えてはくれなかった。とりわけ、ぼくに対してはそうだった。

たまに何か指摘してくれるときは、

「きみは自分の丹田をどこに置き忘れてきたのか」

① というようなことばかり。とにかく、丹田、丹田、丹田……。そしてもうひとつ。弟子の、師匠への仕え方だ。

矢田先生は、十七歳で宮尾勉造^{みやおべんぞう}という柔道家の弟子になった。

宮尾先生は、そのとき六十歳。高名な柔道家だったが、生涯、町道場の先生として生き、道場では柔道だけでなく、書道や茶道も教え、貧しい家の子たちには算術や読み書きを無料で教えた。その宮尾勉造先生に、矢田善之^{よしゆき}という青年は生涯仕えた。

「宮尾先生が、ずっと立って構えると、自分は金縛りになってしまつて動けなくなる。思い切つて組み合うと、なんだか等身大のスポンジをつかんでいるようで、どんな技もかからない。気がつくときとに叩き^{たた}つけられている。十秒も組み合っていないのに、息はあがり、全身汗まみれで、その十秒ほどのあいだ、自分が何をしてたのか思い出せない。ぼくは弟子として命がけで仕えたが、宮尾先生が十とすれば、ぼくはやつと七くらいのところまでしか行けなかった。きみに、宮尾先生の柔道を見せたかったなア」

矢田先生は、しょっちゅう、ぼくにそう話したものだ。

「矢田、お前は一生、これをつづけろ」

宮尾先生は、矢田先生が三十歳のとき、そう言つて、ひとりで架空の相手と対峙^{たいじ}し、正坐^{せいざ}してお辞儀をして立ち上がり、構えから組み手^{組みて}に移り、体落としの技を決めるまでの腕と脚のさばき、全身の動きを、これ以上ゆっくりとはできないという速度でやつてみせてくれた。

矢田先生はその日から、宮尾先生が目の前で見せてくれた「型」を、胆石が悪化する七十六歳の冬まで、一日もかかさずつづけた。四十六年間だ。

胆石の手術のために入院する五日ほど前、閉めることになった道場に行き、ぼくが掃除を始めた、② 矢田先生が柔道着に着替えてきて、きみも着替えるという。

お体は大丈夫なのだろうかと案じながらも、もう三年近く先生から稽古をつけてもらつていなかったぼくは、すぐに柔道着に着替えながら、きつとあの「型」を、ぼくを相手にやつてみせてくれるのだと思つた。

向かい合つて正坐し、深く頭を下げ、立ち上がつて構えた。そして組み合つた。その瞬間、ぼくの体はマリオネット^{マリオネット}の人形のように、先生の動きに乘せられて一回転していた。

先生がひとりで架空の相手と組み合つて、いつも七分から八分かけて行ふ動きは、寸分たがわぬ動きのままに、たったの二秒ほどに短縮されていた。

宙を舞うように見事に道場の畳に投げつけられ、起きあがつて柔道着の乱れを直してから、ぼくは、ありがとうございますと言ひながら深く頭を下げた。③

光栄だった。先生がいま生涯の思い出を与えて下さつたのだ。自分の知らない境地を、まったく次元の違ふ柔道を、いま自分は先生に教えてもらったという歓び^{よろこび}で、涙が止まらなくなつてしまつた。

(宮本輝「三十光年の星たち」による)

(注1) 組み手……相手と攻防の型を行う練習。

(注2) マリオネット……操り人形を使う人形劇。また、これで使われる人形のこと。

- (1) 本文中の には、どのような言葉が入りますか。次のア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア 頭 イ 面目 ウ 指 エ 歯

- (2) 傍線部① とにかく、丹田、丹田、丹田……。とありますが、この表現からは「ぼく」のどのような気持ちがわかりますか。次のア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 何も考えず頭をからっぽにして先生の教えを忠実に行おうとしている。
イ 教えとはいえ同じことのくり返しにいささかうんざりしている。
ウ いくらくり返してもどうしても教えを習得できない自分に憤っている。
エ 何年たっても一つのことしか言わない先生の指導法を怪しんでいる。

- (3) 傍線部② 矢田先生が柔道着に着替えてきて、きみも着替えろという。とありますが、このときの矢田先生は何をしようとしていますか。それを次のように説明するとき、 にあてはまる言葉を、「一生」という言葉を使って四十字以内で書きなさい。(記号も一字と数えます)(4点)

宮尾先生から としている。

- (4) 傍線部③ 深く頭を下げた。とありますが、このときの「ぼく」はどのような気持ちでいるのですか。次のア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 自分の柔道家としての才能を見込んで、最後の最後に自分の最高の技を伝授してくれたことに感激し、必ず矢田道場の精神を後世に伝えようと決意している。

イ 最後まで結局受け身を身につけられないまま終わってしまったことを申し訳ないと思い、そんな自分を見捨てず弟子として扱ってくれた先生に感謝している。

ウ これまで知ることのなかった柔道を先生から最後に教えてもらうことができ、そうするに値する弟子だと認めてもらえたのだと思って深く感動している。

エ 自分のような身勝手な弟子に対しても、決してないがしろにせず最後まで指導を続けてくれる先生の寛容さに、道場をやめたことを心から後悔している。

(5) 次のア、イ、ウのうち、本文の表現の特徴について説明しているものとして、最も適当なものはどれですか。一つ選び、その記号を書きなさい。

(5点)

ア 主人公の心情の動きを中心に描いて話を進め、心情を強調したい部分では体言止めを用いて余韻を残している。

イ 同じ出来事を主人公と矢田先生の両者の視点から描写し、倒置法を用いて二人の心情を細やかに表現している。

ウ 客観的な視点から、現在のできごとと過去のできごとを交互に描く中で、人物の心情は隠喩を用いて際立たせている。

エ 主人公の視点から回想する形で話が展開する中で、組み手中の体の動きを直喩を用いて印象的に描いている。

可笑し^{おか}しさには、ある程度の理解が前提となり、理解するためには、相応の知性が必要だ。一方、知性ではなく、その文化の体験が必要な場合もある。ギャグで笑う場合にも、そのギャグの言葉が通じなければわからない場合もあるし、また、その異様さを感じるためには、常識を知らなければならぬ。

結局、笑いというのは、現実と X のちよつとしたズレに生まれるものである。こうあるべきだという想定とは違う現実を目^まの当たりにして、つい笑ってしまう。しかし、まったく同じものを見ても、笑う人と、笑わない人がいるし、逆に怒りだす人だっているから、誰にでも通用するような「可笑しさ」というものは、まず存在しない、と考えても良いだろう。

言葉が通じない赤子を笑わせるには、「いないいないばあ」のような、ある種の「変化」が必要みたいだ。ほとんどの文化圏で、これが共通している。赤子は、今あるものが、別のものに変わるさまに興味を示す。このように「変化」に注目するのは、動物の本能に起因するのだろう。

興味を示すだけなら、注目して目を見開く程度の反応だが、「変化」が繰り返されると、どうなるか予想がつくようになり、自分が思っていたとおりの変化が起きるのを見て、面白く感じ、笑うようになる。

しかし、少し成長した子供に向かって同じ「いないいないばあ」をしても、笑わせることはできない。もう面白くなくなっているのだ。つまり、「面白さ」は、経験を重ねること面白くなる。最初の繰返しでは、予想することを覚え、そのとおりになるから笑えたのだが、成長したあとは、経験の繰返しによって、「意外性」がなくなつて厭^あきてしまう、ということである。

芸人が繰り出すギャグなども、一世^{一世}を風靡^{ふうび}したものが沢山あつて、日本中の人たちがそのギャグで笑つたのに、一年もしないうちに誰も笑わなくなる。見ても、ただ懐かしいと感じるだけで、もう笑えない。ギャグというのは、短命なものだ。

ギャグだけではない。漫才のネタなども、一度知つてしまうと、最初ほど笑えなくなる。やはり、意外性が消えてしまうからだ。

大人になつて、可笑しさのベテランになるほど、簡単に笑わなくなる。若者ほど、大笑いするのは、経験したことがない「面白さ」のためであり、初めてのものには、免疫ができていないからだ。いふなれば、笑わない防御ができていない、ということでもある。

べつに、笑うことは恥ずかしいことでもないのに、何故かそういった免疫を自然に作つてしまふのは、笑うことは「弛緩^{しかん}」であるためだろう。緊張の反対の状態は、自然界では無防備で危険な状況である。笑うことで隙^{ひま}ができて、攻撃を受けやすくなる。だから、笑わないように防御をするようにできているのではないだろうか。

人はいったいどんなものに笑つてしまうのだろう。人を笑わせることは、けつこう難しい。少なくとも泣かせたり、怒らせたりするよりは断然難しい、というのが小説を書いている僕^僕の感覚である。

人を笑わせることを仕事にしている人も沢山いる。簡単になれる職業ではない。特別な才能が必要だし、常に考えなければならぬ。かなり頭を使う、頭脳的な活動だと思われる。

可笑しくて「笑つた」といっても、実際にはいろいろなレベルや種類がある。爆笑するものも

あれば、ぷつと吹き出すような笑い、にやりとさせるもの、息が漏れる（鼻で笑う）ような場合など、レベルや方向性に違いが見られる。

普通に生活していても、ときどき笑ってしまうことがある。そのほとんどは、他者が言ったこと、あるいは行ったことに対してで、笑いの九割方は、人間の言動が対象となっている。もちろん、ペットが面白いことをしたときにも笑える。残りの一割は、対象が物体の場合だが、その物体は人工的なものであることがほとんどで、つまりは Y ことができるから笑える。小説やエッセイを読んでよく出合うのは、言葉の面白さだ。これは作者のセンスのようなものがある、なにげない言い回しが可笑しかったりする。あるいは、言葉ではなく、「そう考えるのか」と、理屈に笑える場合もある。これは、言動ではなく、思考が可笑しいと感じる場合だ（たとえば、哲学者の土屋賢二先生のエッセイなどは、明らかに理屈の可笑しさである。日本の作家では、ちょっとほかに類を見ない）。

読むだけで笑えるものがあると、作者の才能が感じられて、笑いながら感心する。笑わせることの難しさを知ると、余計に凄さがわかってくる。

（森博嗣^{もりひろし}「面白いとは何か？ 面白く生きるには？」による）

（注）一世を風靡した……ある時代に非常に流行したこと。

(1) 本文中の空欄 X に入る、「現実」の対義語を漢字二字で書きなさい。

（3点）

(2) この文章を読んだ生徒が、「赤子」と「少し成長した子供」について言えることを次の【ノート】にまとめました。a、b にあてはまる言葉を、a は二字で、b は十字で、それぞれ本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

（3点×2）

【ノート】

赤子

「いないいないばあ」をしたとき笑う。

↓本能的に a に興味があり、予想通りの a を面白く感じるため。

少し成長した子供

「いないいないばあ」をしたとき笑わない。

↓同じ経験を繰り返すことによって b ので、飽きてしまうから。

- (3) 傍線部 大人になって、可笑しさのベテランになるほど、簡単に笑わなくなる。とありますが、なぜですか。それを次のように説明するとき、 にあてはまる言葉を、**四十字以内**で書きなさい。

(4点)

「弛緩」である笑うことは、自然界では危険な行為であり、

から。

- (4) 本文中の Y には、どのような言葉が入りますか。次のア～エのうちから**最も適当なもの**を一つ選び、その記号を書きなさい。

(3点)

- ア その機械的な動きを体感する
イ 人間の行動をそこに見る
ウ 人間離れた発想を感じる
エ 普遍的な可笑しさを発見する

- (5) 次のア～エのうち、本文の内容について説明しているものとして、**最も適当なもの**はどれですか。一つ選び、その記号を書きなさい。

(4点)

- ア 相応の知性や常識がなければギャグを本当に理解することはできないので、非常に流行したギャグでもほとんどの人は周囲に釣られて意味もわからずに笑っているだけである。
イ 文化が異なる海外でも日本のギャグが通じることがあるように、一定の基準以上の知性が備わった社会でさえあれば、誰にでも通用する可笑しさというものが存在すると言える。
ウ 読みものの中には、言葉の面白さを感じるものと、書いた人の考え方が可笑しく感じるものがあり、いずれにせよ読むだけで面白いものは相当のセンスがなければ生み出せない。
エ 人を笑わせるのは泣かせたり怒らせたりすることより難しく、仕事にするには特別な才能が必要なので、普通の人間は生活の中でささやかな笑いを生むよう心掛けるべきである。

俳句が誕生してから今までに星の数ほどのという^{おおげさ}と大袈裟だが、かなりの数の句が詠^よまれた。しかし、いくら多くの句が詠まれようとも、また、それらの句が千差万別であろうとも俳句にはたった二つの型しかない。その二つとは一つの素材だけを詠む^{いちぶつ}一物仕立てと二つの素材を詠む取り合わせである。

芭蕉^{ばしやう}の句でいえば、一物仕立てとは次のような句をさす。

① ゆくはる あふみ
行春を近江の人とおしみける

芭蕉

この句は「近江^{おんみ}の人と行く春を惜しんだ」という一つの素材を詠んでいる。散文の中から十七音だけを切り取ったような形をしている。^② いわば散文に近い形式である。

これに対して、取り合わせとは次のような句である。

やまぎとはまんざい遅し梅花^{うめのはな}

芭蕉

この句は「やまぎとはまんざい(万歳)遅し」と「梅花」という二つの素材でできている。

③ この二つはもともと何の関係もないが、俳句という一つの器に一緒に盛られると、互いに照らし合って一つの世界を醸^{かも}し出す。

万歳とは昔、正月に家々を訪れて初春を^(注1)ことほぎ、その家が千年も万年も栄えるようにと祝^{しやう}言^{げん}をのべた門^(注2)付け。町には年が明けるとすぐやってくるが、山里では初春もやや進んでから訪れる。「やまぎとはまんざい遅し」とはこのあたりはそんなのどかな山里であるというのである。

しかし、「やまぎとはまんざい遅し」だけでは山里をただ説明しているにすぎない。

ところが、これに「梅花」が取り合わせられると、山里の初春の景色がぱっと目に浮かぶ。山里は梅の花の咲くのも遅いが、万歳がやってくるのも遅い。遅い梅の花が咲くころになって万歳もやってくる。ここでは「やまぎとはまんざい遅し」は「梅花」によって、一方、「梅花」は「やまぎとはまんざい遅し」によって互いに息を吹きこまれて生きた景色に変じている。こうした句が取り合わせの句である。

(長谷川^{はせがわ}権^{けん}「古池に蛙^{かわず}は飛びこんだか」による)

(注1) ことほぎ……言葉によって祝福して、ということ。

(注2) 門付け……家の玄関口で芸能を演じるなどして報酬をもらう仕事。

- (1) 傍線部① 行春を近江の人とおしみける と同じ季節を詠んでいる芭蕉の俳句を次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書きなさい。(2点)

ア 荒海や佐渡さどによこたふあまのがは 天河
イ 草の戸も住替すまかはる代よぞ雛ひなの家
ウ 閑しづかさや岩にしみ入いる蟬せみの声
エ 旅に病やんで夢は枯野かれのをかけ廻めぐる

- (2) 傍線部② いわば散文に近い形式である。 とは、ここではどういうことですか。次のア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。(2点)

ア 五・七・五の規則を守っているということ。
イ ルールにとらわれていないということ。
ウ 情感にあふれているということ。
エ 含みが多くわかりづらいということ。

- (3) 傍線部③ この二つはもとも何の関係もないが、俳句という一つの器に一緒に盛られると、互いに照らし合って一つの世界を醸し出す。 とありますが、どのような意味ですか。それを次のように説明するとき、ac にあてはまる言葉を、a は八字で、b は十字で、c は八字で、それぞれ本文中からそのまま抜き出して書きなさい。(2点×3)

万歳と梅花に直接の関係性はないが、山里は、a 時期が町より遅く、一方で b ため、ちょうどタイミングが合うことになり、この二つがそろった c という一つの世界を鮮やかに映し出すことになるという意味。

- (4) 次のア～エのうち、取り合わせの句として最も適当なものはどれですか。一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 赤蜻蛉筑波つくばに雲もなかりけり
イ 菊を切る跡まばらにもなかりけり
ウ 大蛭むしゆらりゆらりと通りけり
エ 朝がほや一輪深き淵ふちの色

正岡子規
宝井其角
小林一茶
与謝蕪村

(注1) 承久のころ、住吉へしかるべき人の参らせ給ひけるに、^①をりふし、神主経国、京へ出でたり

けるが、人を走らせて、^②「住の江殿など掃除せさせよ」と言ひ遣りたりけるに、あまりのきらめ

きに、年ごろしかるべき人々の書き置かれたる歌ども、柱、長押、妻戸にありけるを、皆削り捨

ててけり。神主、下りてこれを見て、^③「こはいかにせん」と、足摺りをしてかなしめども、かひ

(足を摺り合わせて嘆き)

なかりけり。

これを見て、古き尼の書き付けける、

世の中のうつりにければ住吉の昔の跡もとまらざりけり^④

これは承久の乱の後、世の中あらたまりける時の事也。

(「今物語」による)

(注1) 承久のころ……承久年間(一一一九～一二二二)。承久三年に承久の乱が起きた。

(注2) 住吉……現在の大阪市にある住吉大社のこと。

(注3) 住の江殿……住吉大社の中の建物。

(注4) きらめき……はなやかに飾りたてること。

(注5) 長押、妻戸……長押は柱の間に渡した横木。妻戸は建物の端などにある戸。

(1) 傍線部①をりふしの読み方を現代の仮名遣いに直し、ひらがなで書きなさい。(2点)

(2) 傍線部②走らせての主語として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア しかるべき人 イ 経国 ウ 古き尼 エ 筆者

- (3) 傍線部③ こはいかにせん とありますが、ここではどのような意味ですか。次のア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア どうしてここに来てしまったのだろうか
イ こうしなければよかったのだろうか
ウ ここはいったいどこなのだろうか
エ これはいったいどうしたらよからう

- (4) 傍線部④ 昔の跡 とありますが、何のことですか。二十二字で本文中から抜き出し、最初の三字を書きなさい。(3点)

- (5) 本文で述べられている主旨として最も適当なものはどれですか。次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

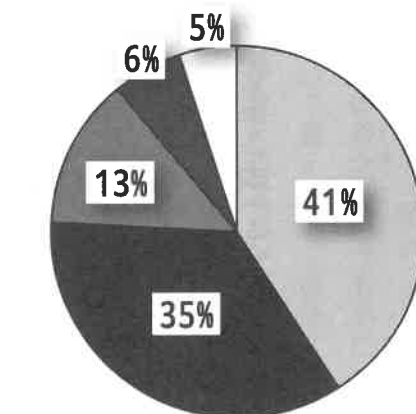
ア 自分の考えや思惑を、人を介して正確に他者に伝えることは難しいということ。
イ 正しいと思って真剣に努めた行動も、悲惨な結果を招くことがあるということ。
ウ 新しい時代が来たのならば、古いものは失われていくものなのだということ。
エ 戦乱の後、都市や人々が立ち直り、かえって昔より栄えることもあるということ。

5

陸斗さんたち中学生は、節水をテーマとする学校アンケートの結果を見て話し合いをしています。次の【資料】と【話し合い】をもとに、あとの(1)・(2)の問いに答えなさい。(11点)

【資料】

節水に取り組んでいる最も大きな理由



- 水道料金を抑えたいから
- 水資源を大切にしたいから
- 水不足への対策になるから
- X から
- その他

(令和5年度学校アンケートより)

【話し合い】

陸斗

【資料】から、水資源を大切にしたいという理由から節水に取り組んでいる人が多いことがわかるね。昨今、社会的に水資源の問題がとりあげられてるからだと思う。でも、一番多いのは水道料金を抑えたいというのが、どうしてなのかわからないな。

千春

水道料金は目に見えて節水の効果がわかるから、目標設定もしやすいのではないかな。経済的な理由は家族の協力も得やすいし、長続きしそうな理由で私はいいと思うな。

一真

【資料】を見るまで知らなかったけど、節水は、節電につながることもあるんだね。

陸斗

そうだね。例えば、高層住宅では最上階にあるタンクに水をくみ上げるために電力を使っているし、そもそも水道水をつくるためにも電力は使われているからね。

千春

そういった節水のメリットを広めていくと、もっと多くの人が節水に対して関心をもつようになると思う。それに、私たち一人ひとりが生活の中で水の無駄づかいを意識することで、少しずつ改善されるはずだね。

一真

うん。どんな場面でどんなふうにすればいいんだろう。みんなで考えてみようよ。

(1) 【資料】の X に入る言葉を、【話し合い】から十字以内でそのまま抜き出して書きなさい。(3点)

(2) 傍線部 みんなで考えてみようよ とありますが、あなた自身が日常生活で水の無駄をなくすためにやっている具体的な取り組みを、「〜こと。」につながるように二十字以上三十字以内で書きなさい。(8点)

6

次の(1)～(10)の傍線部について、漢字の場合は正しい読みをひらがなで書き、カタカナの場合はそれにあたる漢字をかい書で正しく書きなさい。

(2点×10)

- (1) 日頃から積極的に情報を収集すれば、物事を鋭い視点で判断できるだろう。
- (2) 大きくて歴史のあるその建造物の風格は、見る人に威圧感を与えるほどだ。
- (3) 地域の公園のゴミ収集や落ち葉かきをしてくれるボランティアを募る。
- (4) 叔父は寡黙な人だが、私が困ったときには的確なアドバイスをくれる。
- (5) 周りが慌てふためく中で、友人の泰然自若とした対応は素晴らしかった。
- (6) 彼女が示してくれた熱い友情に感激して、彼女の手を強くニギリしめた。
- (7) 一度引き受けたイライはどんなに困難だったとしても必ずやりとげる。
- (8) 彼が医師を志したのは、子どもの頃に観た映画のエイキョウらしい。
- (9) 困難に陥っている人にキュウエンの手をさしのべるのは当然のことだ。
- (10) その議員は、議会の場でどんなことを聞かれてもトウイソクミョウに答える。